

総 説

第41回「日本性科学会学術集会」特別講演

性機能と漢方

北里大学東洋医学総合研究所

森 裕紀子

Key word: ED, 性交痛, 不妊症, 漢方治療

はじめに

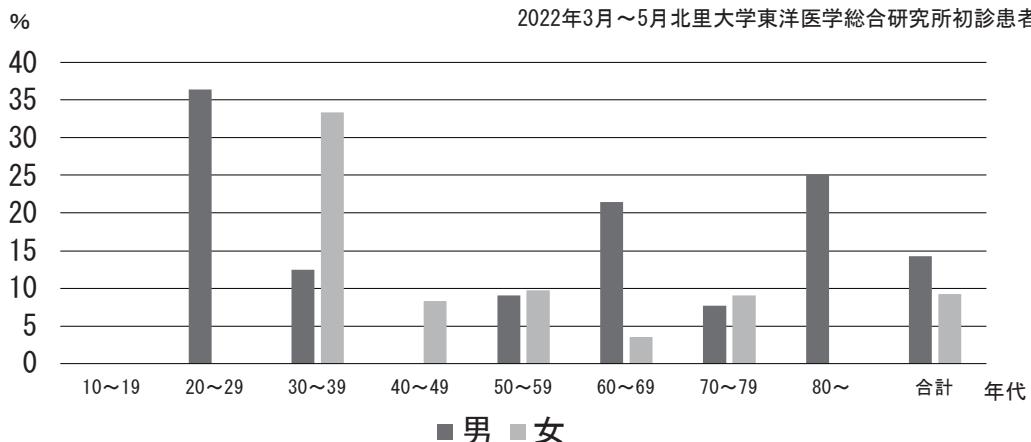
性機能とは大きく性行為と妊娠という2つの働きがある。本稿では漢方治療の基本的な考え方を説明し、その後性行為に関する漢方治療を説明し症例を提示する。不妊治療に関しては文献報告と私見を述べる。

I 性欲減退(図1)

「性欲減退の有無」を主訴に来院する患者は少ないが、漢方診療において参考にする項目である。2022年3月～5月に当施設初診患者の後ろ向きカルテ調査(北里研究所病院臨床研究委員会研究番号 No.22004)にて、初診時の問診票に「性欲減退がある」と答えた患者の

頻度を年齢別に調査した。それによると「性欲減退がある」のは、男性は20代の35%が最も多く、以後減少し50歳以降増加した。女性は妊娠・出産・育児の時期が最も多く、他の年代は10%以下だった。漢方外来受診者のデーターのため健常者の調査とは異なる可能性はあるが、男女とも性成熟期に「性欲減退」が増えたのは、社会生活のストレスや疲労、また妊娠(不妊を含む)・出産育児の女性への負担が原因と考える。加齢に伴って増える「性欲減退」は漢方医学的には「腎虚」の症状の一つと考える。調査の結果からは「性欲減退」は加齢だけではなく、ストレスや疲労が性欲に大きく影響することが分かった。

図1 性欲減退の割合



II 漢方の基本的な考え方

1) 心身一如

心身一如とは、心の不調が体の不調として現れる、体の不調が心の不調として現れることである。心と体は相互に関係しあう。例えば「緊張すると下痢になる」、「体調が悪いと些細な事でイライラする」などは、イメージされやすいだろう。漢方では心と体をまとめて考える。

2) 中庸（図2）

漢方では人の体の中にも陰陽があり、バランスが整っている状態を健康と考え、これを『中庸』と言う。なんらかの原因でバランスが崩れると病気になる。『陽』とは活発、元気でエネルギーが外に向かい、発熱など熱があり、新陳代謝が高まっている状態。これが過ぎると活発過ぎて頻脈となり、体力を消耗する。『陰』は陽の反対で、

図2 中庸

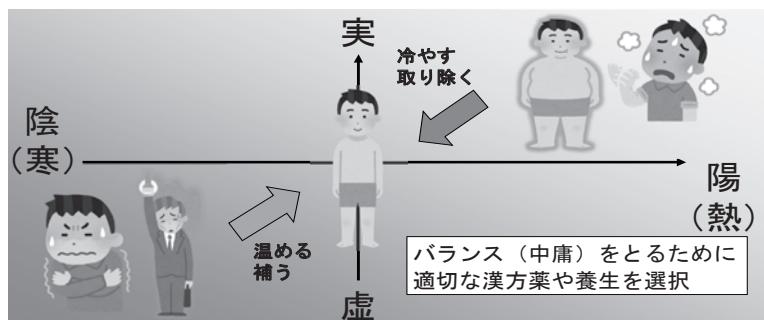
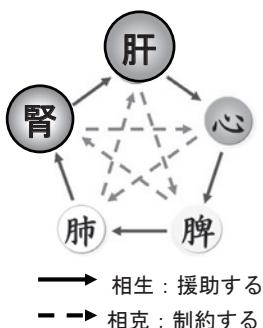


図3 五臓とその関係



生理的機能

肝	自律神経の調節・筋肉トーヌス・血液循環の調節・免疫能に関わる
心	意識・睡眠リズムの調節など
脾	消化吸収機能・筋肉の形成など栄養状態・エネルギー供給源・免疫能・血管壁の正常機能維持などに関わる
肺	呼吸・皮膚の機能
腎	成長・発育・生殖などの生命力・体液の保持・骨格の形成・思考に関わる

静かで落ち着いているイメージで、これが過ぎると寒く、新陳代謝が低下した状態で、冷えを感じる。陰陽は寒熱とも似ている。陰が過ぎると冷え症で、下痢などで衰弱する。虚実は、体格や普段の状態と、闘病反応の強弱の二つを表す。虚は元氣がない、エネルギーが少なく、病気を跳ね返す力が弱い状態、実は元氣があふれて病気を跳ね返す力が強い状態だが、実が過ぎるとメタボリックシンドロームなどの弊害も生じる。よって漢方治療では中庸の状態になるように、虚の状態には補い、過剰な場合は除くことを基本とする。

3) 五臓（図3）

漢方の概念の五臓とは、西洋医学の臓器と同じ漢字を用いるが、別の概念として考える。肝・心・脾・肺・腎は、お互いに影響する。

腎は、成長・発育・生殖などの生命力・体液の保持・骨格の形成・思考に関わる。加齢や不摂生で腎気が減少し腎虚となると、例えば腰痛や夜間頻尿、手足末端の冷えやむくみが出る。精神的に驚きやすくなり、物事に過敏に反応して不眠になることもある。

肝は自律神経の調節・筋肉トーヌス・血液循環の調節・免疫能などに関わる。肝が失調すると相克の関係にある脾を攻撃し、消化機能に影響を及ぼす。その結果、食事から後天の腎気が十分に摂れず腎虚になる。ストレスにより食欲が減少し具合が悪くなつ

た時の治療は、一つは胃腸の治療、もう一つはストレスを緩和する治療である。肝の失調を生じる背景として、仕事の責任の増加や、将来への不安、親の介護の精神的負担などが多い。

脾は消化吸収機能・筋肉の形成など栄養状態・エネルギー供給源・免疫能・血管壁の正常機能維持などに関わる。

4) 気血水

気とは目に見えない生命エネルギーをいう。血は気の働きを担って、生体をめぐり、血液そのものの働きとイメージしてよい。水は血以外の体の水分で、汗や尿や鼻水、むくみなどである。気血水は相互に作用する。気の異常は気虚（疲れやすい、冷えなど）、気鬱（のどがつまる、鬱っぽいなど）、気逆（のぼせ、頭痛、イライラ）があり、血の異常は血虚（肌の乾燥、疲れなど）、瘀血（肌のくすみ、抹消の冷え、痔、月経痛など）、水の異常は水滯あるいは水毒（むくみ、低気圧で頭痛、吐き気、めまいなど）がある。

III ED と漢方治療（図4）

1) 漢方治療が有効な ED (erectile dysfunction: 勃起障害以下 ED) とは

ED はメタボリックシンドロームによる血管や神経障害の初期症状とも言われるため、糖尿病や高血圧症の予防が大切で、食事などの養生が

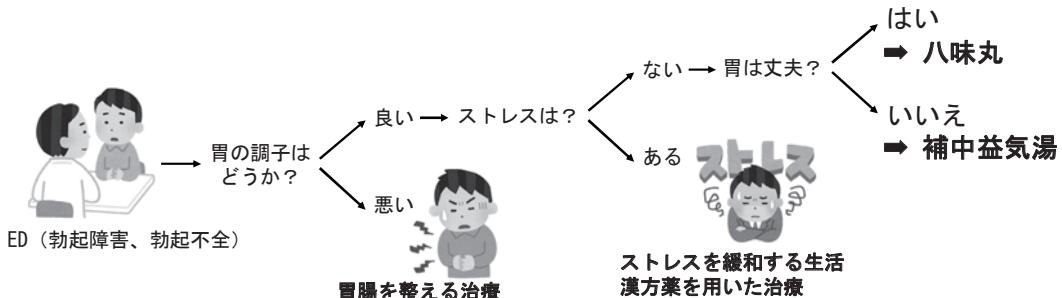
基本だが漢方治療も併用することがある。しかし神経血管障害による器質的に変化生じた ED の漢方治療効果は乏しい。ED は鬱などの精神疾患の初期症状のこともある。患者が西洋医学的治療をためらうことも多く、軽度の鬱症状に対して漢方治療は使いやすい。育毛剤や抗潰瘍薬による薬剤性の ED もあり、該当薬の中止が基本である。抗潰瘍薬を長期服用の場合は、六君子湯などの漢方薬への変更も可能である。ED の原因の一つの LOH (late-onset hypogonadism: 加齢男性性腺機能低下症候群) は、加齢だけでなくストレスや疲労にてテストステロンが減少する。治療はテストステロンの補充療法もあるが、漢方治療の場合テストステロン減少の原因に対して行う。漢方治療が有効な ED は、性欲減退に伴うもの、加齢や病後の体力低下に伴うもの、ストレスの影響によるものが多く、八味地黄丸、補中益氣湯、柴胡加竜骨牡蠣湯などをよく用いる¹⁾。

2) 漢方の頻用処方

八味地黄丸（桂皮・附子・地黄・沢瀉・茯苓・山茱萸・牡丹皮・山茱萸）：腎虚に頻用される処方に八味地黄丸がある。構成生薬の地黄が胃もたれの原因になりやすく、胃腸が弱いと服用できない。

補中益氣湯（黄耆・人参・白朮・陳皮・大

図4 ED と性欲減退の漢方治療のまとめ



棗・甘草・生姜・柴胡・升麻・当帰) : 胃腸が弱く疲れやすい人に頻用される処方が補中益気湯である。人参や黄耆は氣を補い、柴胡と升麻は内臓など下がったものを引き上げる作用がある。さらに胃腸が弱い場合は、当帰などを含まない六君子湯や四君子湯などを用いる。

柴胡加竜骨牡蠣湯 (柴胡・半夏・桂皮・茯苓・黄芩・人参・大棗・生姜・竜骨・牡蠣・大黄) : 2000年前の中国の古典『傷寒論』²⁾ に「胸満煩驚」に柴胡加竜骨牡蠣湯を使うと記載があり、胸のあたりが張って苦しく、驚きやすい状態に用いる。竜骨は大型哺乳類 (主に鹿) の化石で、『藥徵』³⁾ に「臍下の動を主治するなり。旁ら煩驚・失精を治す」と記載があり、牡蠣はカキの殻で「胸腹の動を主治するなり。旁ら驚狂・煩躁を治す」と記載がある。腹診で胸腹部に腹部動悸を触れ、神経過敏な人に用いる処方である。腹力が弱い人には桂枝加竜骨牡蠣湯を用いることが多い。

3) PDE-5阻害薬と漢方治療の比較 (表1)

漢方治療は患者の体質や症状に合わせて選択するため、副作用は少ないが、生薬の黄芩や桂皮などのアレルギーによる副作用は起こりうる。一方PDE-5阻害薬は血管拡張作用による顔のほてりや頭痛などの副作用を生じる。またニトロ

グリセリンなどを服用している者には禁忌である。

漢方治療は心身を整え、その結果としてEDが改善する。そのため漢方の治療効果が表れるまでには、早く数日、場合によっては数か月かかる。また効果のないこともある。その点PDE-5阻害薬の効果発現は早く、また無効な場合も早くわかる。

不妊治療において、EDで性交ができないことが原因の時がある。人工授精を含む生殖補助医療に対する抵抗、PDE-5阻害薬の副作用や使用そのものに対する抵抗感をもつ男性は多く、不妊治療が進まない。この場合、漢方治療で男性の体調が改善すると、たとえEDが改善しなくとも、PDE-5阻害薬の使用や生殖補助医療の抵抗感が減り、不妊治療に積極的になることがある。

IV 性交痛に効く漢方

性交痛は、女性の性欲減退の理由の一つにもなる。

性交痛の原因は多い。西洋医学的にはホルモンの減少にともなって膣分泌物の減少や膣粘膜が弱くなるときは、ホルモン剤の膣錠や潤滑油を使用する。漢方治療では加齢に伴う腎虚と考えて八味丸や、肌や粘膜を丈夫にするために補

表1 漢方とPDE-5阻害薬と比べての違い

漢方薬	PDE-5阻害薬
副作用	少ない
効果発現	個人差あり、時間がかかる (数日~数か月)
持続時間	制限なし。効果に個人差大
食事の影響	なし
費用	1日約100~1000円 (保険・自費)
	あり (顔のほてり、頭痛など)
	早い (10分~1時間)
	制限あり 3~36時間
	あり
	1回約1000円~ (不妊治療の場合保険診療も可能に)

漢方治療は、心身全体の治療をして、その結果としてEDが改善する。

表2 婦人科でよく用いる処方の使い分け

処方名	当帰芍薬散	桂枝茯苓丸	加味逍遙散
気血水	水毒・血虚・瘀血	瘀血・気逆・(水毒)	血虚・瘀血・気逆・氣鬱・水毒
症状	めまい、四肢の冷え、冷えて足がむくむ。下痢傾向、疲れやすい	上半身ののぼせ得足先の冷え肩こり、便秘、頭痛	不眠、イライラ、のぼせ、足の冷え、精神不安定、多彩な症状
構成生薬	当帰・芍薬・川芎・沢瀉・朮・茯苓	芍薬・桃仁・牡丹皮・朮・茯苓・桂皮	当帰・芍薬・牡丹皮・朮・茯苓・柴胡・薄荷・甘草・生姜・山梔子

血薬の四物湯を使うことが多い。しかし効果ができるまでに時間かかるので、西洋医学的治療と併用することを勧める。

年齢に関係なく、過緊張や、性交への嫌悪感が原因のことがある。カウンセリングが必要なこともあります。性交以外も過緊張になる場合は、気の巡りを整える半夏厚朴湯や抑肝散などの気剤を用いる。

子宮内膜症の癒着による性交痛は多い。漢方薬で癒着は減らないが、漢方治療で症状の緩和はできる。子宮内膜症を漢方では瘀血と考え、瘀血を取り除く基本処方の桂枝茯苓丸をよく用いる。

冷えも痛みの原因になる。冷えの治療は漢方治療が得意である。冷え以外にも体調不良は性交痛の原因になりうる。女性によく用いる当帰芍薬散、桂枝茯苓丸、加味逍遙散の構成生薬と気血水による使い分けを表2に示す。

V

■症例1. 34歳男性 【主訴】 勃起不全(ED)

【既往歴】 特になし

【現病歴】 2年前に結婚。生活の変化、睡眠不足、職場のストレスで体重が10kg増加

した。妊娠希望の妻から排卵日を教えられるとプレッシャーが加わり、勃起不全を感じるようになった。転職により仕事のプレッシャーは減ったが、EDは改善しないため当施設の初診となった。

【自覚症状・所見】 身長177cm、体重72kg、血圧110/62mmHg 脈98/分、排便問題なし。寝汗をかく。足が冷える。肩・首のこり。舌診：乾湿中間、紅、脈診：虚実中間、腹診：腹力実、胸脇苦満（左）を認めた。

【経過】 腹証から柴胡加竜骨牡蠣湯去大黄を処方した。1ヶ月後の外来時には「体の堅さがほぐれた感じがする。妻との夫婦生活も順調」という。同処方を半年継続したのち、エキス剤に変更し、半年後に妻の妊娠を認めた。

■症例2. 42歳女性 【主訴】 性交痛

【既往歴】 39歳自然流産。40歳チョコレート囊腫摘出術。

【現病歴】 36歳より月経痛が強くなった。最近は月経時以外も腹痛、腰痛が出現し日常生活も制限され、夫婦生活がなくなり、当施設初診となる。人工授精やARTは希望して

いない。

【所見】 身長153cm、体重46kg、自覚症状は、小便8回/日、よく下痢になる、疲れやすい。手足末端が冷える、足がむくむ。診察では、脈は沈で弱く、舌下の静脈怒張、腹診では右臍傍の圧痛を認めた。

【経過】 水毒、冷え、血虚、瘀血から当帰芍藥散料を処方した。2週間後は月経前の腹痛も月経痛も緩和した。痛みが緩和して夫婦生活が可能となった。漢方服用開始1カ月ごろの排卵にて妊娠。妊娠19週まで漢方治療継続して終了となった。

VI 不妊治療に対する漢方治療の文献報告

不妊症の原因で、男性因子として精子の数の減少や運動率の低下がある。もともと精子所見が悪い場合もあるが、病後や疲労で悪化することも多い。この場合体調の回復後数か月すると精子所見が回復する。疲労に関しては自覚がない場合も多い。これらを腎虚として八味地黄丸や補中益氣湯を使うことが多く、マウスなどの基礎実験でも精子所見の回復の報告がある^{4) 5)}。

女性の排卵障害の原因の一つに多囊胞性卵巣がある。これに対して温経湯が有効という報告⁶⁾がある。著者自身の臨床経験では、若い患者には桂枝茯苓丸のほうが温経湯より使用頻度が多い。高齢難治不妊に補腎薬の八味地黄丸⁷⁾を使用して妊娠率が改善した報告や、胃腸が弱い場合は啓脾湯⁸⁾が有効という報告がある。

VII 不妊治療に対する漢方治療についての私見

両側の卵管閉塞や無精子症などは自然妊娠は不可能で、漢方治療だけでは妊娠しない。一方漢方治療のみで、排卵周期の改善や性行為

が可能となり妊娠することはよく経験する。しかし近年挙児希望の女性の高齢化もあり、挙児を希望してから生殖補助医療の治療を開始するまでの期間が短く、漢方のみで治療できる期間は少ない。体の不調があるなら、挙児希望の有無に関係なく漢方治療を開始して欲しいと思う。例えば、排卵障害の原因の一つの多囊胞性卵巣かつ肥満の場合は、体重が数kg減少することで排卵障害が改善することがある。同様に漢方治療だけで排卵周期の改善を認めることはある。排卵誘発剤が必要な場合でも漢方治療の併用で、排卵誘発剤の投与量が減ることは多い。

特に疲れやすい、冷えなどの体調不良のある女性には漢方治療の併用を勧めたい。体調が改善した状態の方が、排卵誘発剤の反応もよい⁹⁾。その他に漢方治療の併用を勧める理由は、不妊治療のゴールは妊娠ではなく、健康な状態で出産し育児をすることで、そのためにも体調を整えることは大切だからである。また妊娠出産という結果が得られなかつた時に、より心身が健康な方が、その後の人生を肯定的に考えて選択できるからである。

VIII まとめ

漢方治療によって心身の健やかな状態になることが、性機能によい効果をもたらす。

参考文献

- 1) 森裕紀子:勃起障害(ED)の3症例、漢方の臨床 59: 707-711, 2012
- 2) 大塚敬節:臨床応用傷寒論解説、創元社、東京, 279. 1966.
- 3) 吉益東洞:藥徵. たにぐち書店、東京, 161-164. 2017
- 4) Yuying Wang, Chiaki Murayama,

- Seiwa Michihara: Effects of Hachimijiogan, a Kampo powder, on epididymidis sperm characteristics in healthy male rats. *Reprod Med Biol* 14 : 33-38, 2015
- 5) Furuya Y, T Akashi, H Fuse : Effect of Bu-Zhong-Yi-Qi-Tang on seminal plasma cytokine levels in patients with idiopathic male infertility. *Arch Androl* 50 : 11-14, 2004
- 6) 後山尚久:多嚢胞卵巣(PCO)の治療における温経湯の随証療法の実効性に関する検討. *漢方と最新治療* 22: 71-75, 2013
- 7) 志馬千佳:アンチエイジングを目的とする八味地黄丸により妊娠に至った難治性不妊50症例の検討. *産婦人科漢方研究のあゆみ* 20: 99-105, 2008
- 8) 志馬千佳:胃腸虚弱で“八味地黄丸”が服用出来ない不妊症患者の老化予防に“啓脾湯”という選択肢. *産婦人科漢方研究のあゆみ* 36: 35-38, 2019.
- 9) 森裕紀子:漢方治療の併用が有効だった難治不妊2症例. *漢方の臨床* 66: 954-958, 2019

